

主義者 労働者 団結せよ

共産主義者同盟(紅旗)と

共産主義者同盟(労働者組織委員会)の

統合報告

1

党と、五十八年日共から分派した共産主義者同盟をいふこととした日共にかわる前衛の建設をめざした歴史を引きつづめるのである。

共産主義者同盟(紅旗)以下紅旗と略し、共産主義者同盟(労働者組織委員会)以下労働者組織委員会と略し、一九七九年七月より、共同の党建設について協議を重ねてきた。協議は、共産主義者同盟および労働者の総括、綱領問題、情勢の特徴と当面する任務、組織問題の範囲にわたっておこなわれた。協議は、同志的な雰囲気の下、真剣かつ率直になされた。これら諸領域についての討論を通じ、両者は、総括、綱領、戦術、組織問題で基本見地が大旨一致することを確認した。

また、当面完全には意見の一致をみなかった問題は、両者の統合に当っては副次的なものであり、討論の自由と行動の統一の原則の下、事後の論争により解決していくことを確認した。したがって、両組織を直ちに統合し、単一の確固とした革命党の建設を断固前進させるべきことで完全なる意見の一致をみた。両組織は、統合後の組織名称を共産主義者同盟(紅旗)とすることで合意した。

2

紅旗と労働者組織委員会とは、わが国における共産主義運動と革命党建設において地盤を共有している。すなわち、両者は、一九二二年に結成された五十年代後半に修正主義に転化するまでの日本共産

党と、五十八年日共から分派した共産主義者同盟をいふこととした日共にかわる前衛の建設をめざした歴史を引きつづめるのである。

共産主義者同盟(紅旗)以下紅旗と略し、共産主義者同盟(労働者組織委員会)以下労働者組織委員会と略し、一九七九年七月より、共同の党建設について協議を重ねてきた。協議は、共産主義者同盟および労働者の総括、綱領問題、情勢の特徴と当面する任務、組織問題の範囲にわたっておこなわれた。協議は、同志的な雰囲気の下、真剣かつ率直になされた。これら諸領域についての討論を通じ、両者は、総括、綱領、戦術、組織問題で基本見地が大旨一致することを確認した。

また、当面完全には意見の一致をみなかった問題は、両者の統合に当っては副次的なものであり、討論の自由と行動の統一の原則の下、事後の論争により解決していくことを確認した。したがって、両組織を直ちに統合し、単一の確固とした革命党の建設を断固前進させるべきことで完全なる意見の一致をみた。両組織は、統合後の組織名称を共産主義者同盟(紅旗)とすることで合意した。

紅旗と労働者組織委員会とは、わが国における共産主義運動と革命党建設において地盤を共有している。すなわち、両者は、一九二二年に結成された五十年代後半に修正主義に転化するまでの日本共産

向にきつぱり訣別せんと決意したこと、敬意を表明した。

労働者組織委員会は、紅旗が共産同盟よりその経済主義、テロリズムを表現してきた自己の各分派としての前史をすでに正しく総括し、その反省の上に党建設をすすめてきたことを高く評価した。紅旗は、労働者組織委員会が共産同盟全体の総括を行うのみならず、経済主義的な方針に止って来た過去を真剣に切開き、その意義と誤りを正しく指摘し、偏

労働者組織委員会は、紅旗が共産同盟よりその経済主義、テロリズムを表現してきた自己の各分派としての前史をすでに正しく総括し、その反省の上に党建設をすすめてきたことを高く評価した。紅旗は、労働者組織委員会が共産同盟全体の総括を行うのみならず、経済主義的な方針に止って来た過去を真剣に切開き、その意義と誤りを正しく指摘し、偏

労働者組織委員会は、紅旗が共産同盟よりその経済主義、テロリズムを表現してきた自己の各分派としての前史をすでに正しく総括し、その反省の上に党建設をすすめてきたことを高く評価した。紅旗は、労働者組織委員会が共産同盟全体の総括を行うのみならず、経済主義的な方針に止って来た過去を真剣に切開き、その意義と誤りを正しく指摘し、偏

場として闘い取るべきことで一致した。一致は、資本主義の生産関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態であり、これをもって人間社会の歴史がおわることを人間社会の歴史、すなわち共産主義社会は、資本主義によってもたらされた生産力と社会勢力の作用によって準備され、必然的に生み出されること。

資本主義社会を破壊し、諸階級を廃絶することができるとは、自己の労働力を販売し、資本家のために働かざるで生きることをめざしている労働者階級だけであること。

プロレタリアートは社会革命を表現することによって自己を解放し、社会の諸階級への分裂をなくすることができると。

プロレタリアートの社会革命の不可欠の条件は、プロレタリアートの階級独裁であり、プロレタリアートは、まず、自己を支配階級にたかめねばならないこと。

プロレタリアートは、既存のブルジョア国家権力を自己の解放のために利用することはできず、これを打ち倒し、自分の国家権力を闘いとらねばならないこと。

二十世紀初頭、資本主義は資本独占の時代、金融資本の時代、すなわち帝国主義の段階に到達したこと。

世界支配をめぐる帝国主義列強間の抗争は、帝国主義戦争を不可避としたこと。

しかし、これらすべては、プロレタリアートと被抑圧民族の解放闘争をつよめることとなり、事実一九一七年ロシア革命により世界プロレタリア革命の時代がはじまったこと、以上これらの基本見地を中心とするものである。

両者は、今日の世界の発展段階および国際情勢の分析で基本的意見が一致した。すなわち、

現在、世界は帝国主義とプロレタリア革命の時代にあること。

今日、アジア、アフリカ、ラテンアメリカで民族革命が爆発し、中国をはじめとしたプロレタリア諸国において社会革命が前進し、帝国主義諸国でプロレタリアートの反抗が増大していること。

修正主義によって支配されるソ連は、全世界におけるプロレタリアート・人民の革命闘争を抑圧し、米帝を先頭とした西側帝国主義列強は、内部矛盾・対立を激化させながらも反攻を強化していること。

こうしたことから、民族解放と革命がいぜん発展しているが、しかし世界戦争の要素もまたつまっていること。

革命が戦争をおし止めるか、戦争が革命をひきおこすか、いずれにせよプロレタリアートの最後の勝利はさげられないこと。

この実現のためには、社会民主主義、現代修正主義と断固として手を切り、これと仮借なく闘い、国際共産党を再建することが必要であること。

以上を骨子とする分析・見地で一致した。

しかし、連社会の階級的性格およびこれと関連する問題において、両者の意見は厳格な一致をみなかった。すなわち、紅旗は、今日のソ連は口先で社会主義をとなえてはいるが、実際は現代修正主義の支配をテコとした新しい形態でのブルジョア階級が支配する官僚制国家

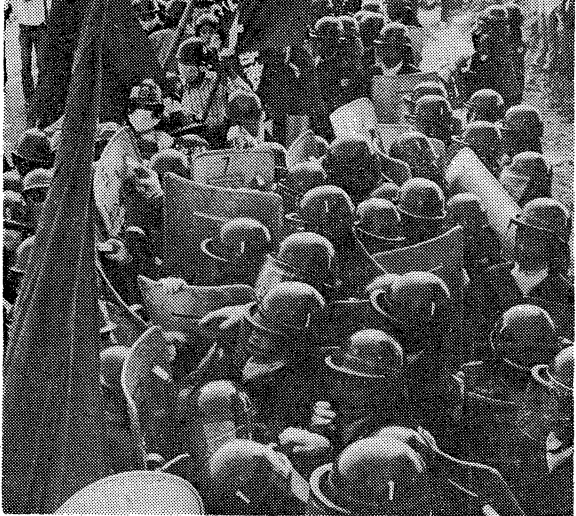
独占資本主義社会であり、西側帝国主義と世界支配を争っている帝国主義国家である、と主張した。

これに対し、労働者組織委員会は、今日のソ連は現代修正主義党によって制圧され官僚による専制支配が確立し、米帝と共にあらゆる分野において超大国であり、世界プロレタリアートの敵であるが、ブルジョア独裁国家、社会帝国主義国家とは規定しない、と主張した。

両者は、この問題をめぐる意見の不一致は、両者の統合に当って決定的障害といえるものでもなく、統合した後、討論の自由と行動の統一の原則の下、討論によって解決していくべきことを確認した。

両組織は、わが国の社会的発展段階、国家をめぐる階級と政治勢力の相互関係の客観的分析、および日本におけるプロレタリアートの当面する中心的政治任務に関する主張で完全に一致した。

(三画につづく)



社会主義をめざし共産

(二面から)

は、国家と密着し結びつき、これを自己のプロレタリアート・人民に対する階級支配の道具としている。同時に、金融独占ブルジョアジーは、かれら全体の利益を貫き、かれらと握りの者による支配をおし、かたがたの議会制民主主義政体を維持し、天皇制を革命の防壁として利用している。社会党、共産党をはじめとした日和見主義、社会排外主義、およびブルジョア政体は、ブルジョア制度を賛美し、資本家の階級支配を補完している。今日、わが国ではプロレタリアートは最大の階級であり、その政治的進出がもたらしている。全て、こうしたことは、日本におけるプロレタリアートの中心的政治任務が、日本帝国主義国家権力を打倒し、米帝をわが国から一掃し、プロレタリアートの階級独裁国家を樹立する点にこそあることを示している。

6

両組織は、国際情勢の現局面の評価と当面の戦術の環においても原則的な合意

に達した。すなわち、今日、経済は混乱し、失業率、半失業率の増大をはじめ労働者階級・人民の状況が悪化し、米帝、西欧の帝国主義との経済的摩擦は激しさを加え、ソ連とのアジアにおける支配をめぐる競争はつよまる一途である。日帝はこの競争戦をのりきり、労働者・人民の反抗をおさえ、アジアとりわけ朝鮮人民の革命的決起を鎮めるために、搾取と収奪をつよめ、米帝との軍事的連携および自



己の軍事力の強化をはかり、新植民地支配階級からの離反をいっそうおし進めようとする。このように、情勢の現局面は、帝国主義の相対的安定期が終わり、革命と戦争の激動の時代へむかっていることを示している。社会主義革命の物質的条件は、わが国ではすでに成熟し、革命的客観的条件も有利に整いつつある中で、しかし、主体的条件はいまだ不十分である。この状況を整理し、いざ大巾な立役をみせよう。

7

このように、共産主義者同盟(紅旗)と共産主義者同盟(労働者組織委員会)とは、総括・綱領・戦術・組織問題で基本的な一致をみたのである。両組織の統合は、革命建設が分散し混乱している今日の状況のなかから、この混乱を打破するに少なからぬ意義をもっている。この統合の与える影響は、たしかにささやかなものである。

8

団結大会をひらき新たな戦闘を宣言

全国の労働者・人民の皆さん、

共産主義者同盟(紅旗)と共産主義者同盟(労働者組織委員会)は、日本革命を勝利に導く単一の革命党の建設をめざし、両党の組織的統一を図るため、十月八日に団結特別大会を開きました。

大会は、両党の代表による統合組織委員会によって組織され、選出された両党の代表の出席によって構成されました。

大会は、資格審査ののち、大会議長団と大会書記を選出し、力強い大会宣言のあと、さまざま、大会議案の提出に入りました。

提案された議案は次のものである。

一、共産主義者同盟(紅旗)と共産主義者同盟(労働者組織委員会)の統合に関する報告

一、綱領に関する提案

一、規約に関する提案

一、諸アジェンダに関する提案

①組織に関するアジェンダ

②共産主義者同盟(労働者組織委員会)の綱領に関するアジェンダ

③労働運動の戦術に関するアジェンダ

④「階級闘争」解放運動に関するアジェンダ(草案)

一、情勢の特徴とわが党の任務
(綱領は「紅旗」創刊号および「共産主義者同盟(紅旗)」創刊号および「共産主義者同盟(労働者組織委員会)」創刊号に掲載された。

産主義者同盟(労働者組織委員会)の統合に関する報告

一、綱領に関する提案

一、規約に関する提案

一、諸アジェンダに関する提案

①組織に関するアジェンダ

②共産主義者同盟(労働者組織委員会)の綱領に関するアジェンダ

③労働運動の戦術に関するアジェンダ

④「階級闘争」解放運動に関するアジェンダ(草案)

一、情勢の特徴とわが党の任務
(綱領は「紅旗」創刊号および「共産主義者同盟(紅旗)」創刊号および「共産主義者同盟(労働者組織委員会)」創刊号に掲載された。

また、両党の間での綱領論争の不一致となつた社説規定をめぐる論争について、自らの国家権力の問題をアジェンダにする態度についての総括的提起と、今後の同志的な歴史的実践的分析と論争の中で、ソ連の国家の階級的性質についての評価が下されうという方向が明確にのべられ、万場の拍手を受けた。

また、労働者組織委員会の同志たちと共に労働運動の中で、長い闘争に闘つてきた同志からは、この団結が夢のようにあり、今後の不拔の党建設に向けて身のかきしめる思いと決意がのべられ、提出された全議案が、全代表委員の賛成で採択された。

この団結大会は、風のような八十年代を勝利の時代とするため、わが国の社会主義革命を準備する断固たる闘いの戦闘宣言である。

新しく生まれ変わった組織は、日本共産主義運動の分散と混乱を打破する歴史的任務を果すため、より一層謙虚に大義に燃えて闘う。

共産主義者同盟(紅旗)の団結力と共産主義者同盟(労働者組織委員会)の団結力とを結び、全国的に共産主義者・労働者・団結せよ、先進的労働者は紅旗に結集せよ、

共産同(紅旗)の戦闘的団結万才!

このように、共産主義者同盟(紅旗)と共産主義者同盟(労働者組織委員会)とは、総括・綱領・戦術・組織問題で基本的な一致をみたのである。両組織の統合は、革命建設が分散し混乱している今日の状況のなかから、この混乱を打破するに少なからぬ意義をもっている。この統合の与える影響は、たしかにささやかなものである。

この団結大会は、風のような八十年代を勝利の時代とするため、わが国の社会主義革命を準備する断固たる闘いの戦闘宣言である。

共産主義者同盟(紅旗)の団結力と共産主義者同盟(労働者組織委員会)の団結力とを結び、全国的に共産主義者・労働者・団結せよ、先進的労働者は紅旗に結集せよ、

労働者階級の中に巨大な党を

いまこそ党の旗かけ

労働者の闘いに力を！

争議組合労働者

単一革命党建設への第一歩、共産主義者同盟（労働者組織委員会）と共産主義者同盟（紅旗）の統合を祝する。

オールショック以来のスタグフレーションと経済危機のなかで、資本家達は、全労働者の責任を労働者・人民に転嫁し、合理化の切り、配給、倒産が全産業をおおっている。

だが、共産主義者同盟（紅旗）は、資本家の番犬になる労働運動をつくらず、「統一」の美名で、分裂運動をくり広げている。しかし、これを粉砕し、それに取ってかわる統一指導部が形成されていない状況。

党建設をめざし決意す

都職労働者

さらに多くの細胞建設を

中小企業労働者

社共に変る革命党を

全通労働者

共産同盟（紅旗）と共産同盟（労働者）は、過去のテロリズムと経済主義の克服と現在の日本共産主義運動の混迷と分散の二時期を革命的に清算し、新たな思想、政治、組織路線における一致を闘い、統一を達成しよう。この地平こそ日本共産主義に変わる単一革命党をめざす大義にあり、さやかではあられ輝かしい第一歩である。

ブルジョア支配の危機は深まり戦争準備、政治反動化、労働運動の右翼的再編、下層の切り捨てが進行し、労働者、勤労人民に対する攻撃を一段と強めている。超利潤の減少傾向は、民同労働官僚の危機意識を高め、特権的地位の防衛のため、労働運動共同体・経営参加路線に急激な歩を進めている。総評主流、富家・専横の社会公中軸路線、国際自由連の加盟の動きは、政策一組合レベルを貫く一対外主義的姿勢といわねばならない。

わが全通民同も反マル生闘争の清算を年末闘争の早期妥結によって決め、特異、ニセ時短、二組との合併を軸とした中期路線を管統制とレッドパージを以て共につらあげていく。

本的に一致し、かつ相違点を鮮明にし、原則的に協議され統一に至ったことはすばらしいと思う。

しかし、今後とも、この綱領を単なる空文に止めるべきではない。綱領をかげ四年目を迎える紅旗は、たゞ労働運動の発展に照らされ発展してきた、私自身もその試練にさらされてきたといえる。まっとうな自己の欠陥を洗い出すことを恐れず、同志的な自己批判・相互批判の思想、政治闘争の作風を作っていくなら単一党建設と政治路線を正しく発展させていくと思う。

私達の統合は、未だ全国の多くの共産主義者の一部にすぎない。今後、何よりも労働者階級・人民に単一党建設の事業を呼びかけていかなければならないと考える。

すべての共産主義者、労働者、人民の皆さん、

激動の八十年代の階級闘争を革命闘争の勝利とする巨大な単一党の建設をめざし、ともに奮闘していくことはありまじい。 団結万歳！

団結万歳！

労働者



共産主義者同盟（紅旗）と共産主義者同盟（労働者組織委員会）の統合は、八十年代の日本における革命闘争を大きく前進させる出発点になるだろう。そうさせなければならない。使命の重大さをしっかりと自覚した厳格な決意をこめて、この統合を喜びたい。

六十年代後半のベトナム反戦闘争、教育学園闘争、七十年代安保闘争、七十二年沖縄闘争という一連の闘争は、階級闘争を権力の問題の闘争としか捉えられなない地平にまで押し上げてきた。自己の思想形成をこの闘争と密に結びつけてきた私には、革命の問題を常にみつづけてきたのである。しかし七十年代後半の挫折というのである。あるべき共産主義革命の未来から党建設と軍建設を語る部分については、また民主主義要求を戦闘的に闘うことに満足している部分にもついていけず、私は共産主義をめぐりサークルの中で自己を正気化し、この七十年代をすこしづつきた。

このような意識のもとで活動には当然にも限界がある。大衆運動の場面では共産主義者同盟（紅旗）と共産主義者同盟（労働者組織委員会）の統合は、八十年代の日本における革命闘争を大きく前進させる出発点になるだろう。そうさせなければならない。使命の重大さをしっかりと自覚した厳格な決意をこめて、この統合を喜びたい。

私は、関西で活動している同盟員です。共産主義と労働運動を結びつけた労働者大衆の闘いのなかで実践しています。

この活動は、わが党「紅旗」の党建設の活動の一端であり、先進的、戦闘的労働者のみならず、広範な労働者階級の労働者を党に引き寄せ、迎え入れることと不可分一体のものであります。

今回、共産主義者同盟（労働者組織委員会）の同志と統合を遂げたことは非常に重要なことである。この統合は、戦闘的・戦闘的な闘争のなかで、またわが党に心をよせる労働者、また批判的読者の人々に、自信と確信をもたせ報告できます。

社共に変る革命党の建設を闘いの中

共産同盟（労働者）と共産同盟（紅旗）の統合が実現され、心から喜びに思っています。とりわけ、労働者組織委員会の諸同志において、過去の経済主義的なサークルに止っていたこの傾向が総てされ、まっとうな自己の欠陥を洗い出すことを恐れず、同志的な自己批判・相互批判の思想、政治闘争の作風を作っていくなら単一党建設と政治路線を正しく発展させていくと思う。

私達の統合は、未だ全国の多くの共産主義者の一部にすぎない。今後、何よりも労働者階級・人民に単一党建設の事業を呼びかけていかなければならないと考える。

すべての共産主義者、労働者、人民の皆さん、

激動の八十年代の階級闘争を革命闘争の勝利とする巨大な単一党の建設をめざし、ともに奮闘していくことはありまじい。 団結万歳！

一・二八狭山闘争へ

狭山再審要求中央集会 場所：芝公園23号地 午後6時
主催：一部落解放中央・東京共闘会議、部落解放同盟中央本部

訂正 紅旗四十三号の四角、赤堀闘争の記事の「上」は「抗」に訂正します。

現代修正主義批判

(1)

わが党はすでに「紅旗」四十一号の第三回大会特集号で、「綱領の一部改正」を報告している。

この論文は、その内の「現代修正主義の規定」(綱領第二章第二十一項の改正)を基礎づけたものである。この綱領改正の目的は、現代修正主義の本質を前面に押し出して綱領に明確に、ソ連におけるプロ独の修正主義の歴史の時期区分については、綱領から削除することであった。

その理由は四十一号に詳しいので省略するが、わが党が日本共産主義運動の分散と混迷を打破するべく、現下に盛り上りつつある統一戦線を、一歩切りひろく上へ、路線上の原則においてゆずれず、副軸において柔軟な政治的態度をとることで、自らの積極的な姿勢をしめすことになったといつても過言ではない。

認の上で、綱領を改正したわけだが、現代修正主義の本質の特徴をついた独自の分析、ソ連のプロ独の修正主義の歴史の時期区分についての独自の分析と態度について、はつきりしめすことがわれわれの義務である。

同時に、今日の日本では日本共産党が現代修正主義に公然と転化し、金銭的資本主義の専制支配を補完している。この日共現代修正主義に代る唯一の革命党建設が急務となっていることにより、ソ連現代修正主義の発生と台頭の歴史を分析し、その教訓を導くことは重要な問題である。

それ故にわが党の独自の分析と見解をしめし、粘り強い論争と検証のまな板にのせつつ、これらをもめて日共現代修正主義批判へしほりあげていく事がわれわれの目的とするところである。批判をお願いする。

序文

「プロレタリア独裁は、階級闘争の終結ではなく、新しい形でのその継続である。プロレタリア独裁は勝利して政治権力を握ったプロレタリアート

が、うちまかされはしたが絶滅してないブルジョアに対して、また消滅しない反抗することをやめない、いかな反抗をつめたブルジョアに対して

構成

- 第一部 ソ連における現代修正主義はどのように発生して、ソ連のプロ独国家の変質へ至ったか
- 第二部 ソ連はどのようにして社会帝国主義へ転化したのか
- 第三部 現代修正主義とは何か——その理論的把握と整理

第一部目次

序文 ソ連における社会帝国主義への変質と転化の歴史の時期区分について(以上今号)

- 一章 レーニン政治の放棄と修正
- 二章 プロレタリア独裁の変質としての経済的社会的基礎の形成
- 三章 スターリン憲法とプロ独国家の暴力的転換

今日のソ連は 社会主義か

さて、今日に至るソ連社会の変質の歴史を論ずるにあたって、まず、今日のソ連の官製の社会史の発展区分をみておきたい。

それは次のようにまとめられている。「ソ連社会史では、二つの基本的な段階が区別される。

第一段階——資本主義から社会主義への過渡期、社会主義の成立期(一九一七年—三十年代後半)この二十年の間に、社会生活のあらゆる面で革命的変革が

社帝めぐる 国際的分岐

わが党の 社帝規定

ソ連はいつ社会帝国主義へ転化したのか

これら変質の問題をめぐって、国際共産主義運動上、二つの相対立する代表的見地が存在する。

その一方は、中国共産党の「ソ連はどのようにして社会帝国主義国家に変質したのか」論文に導かれた社帝規定論である。

他方は、トロツキーの「墮落する労働者国家」に源流をおく、反スターリニズムでありながら「社会主義国家」とする現在のトロツキー派潮流である。

これは、世界的規模で国際共産主義運動の分岐と潮流を形成している。

わが党は、この分岐と潮流をこの一環としており、とりわけ、ソ連内諸論争にも反映している。

わが党をめぐりつつのソ連の分岐は、中国共産党の社帝規定から大いに学び、今日では、社帝規定において一致しており、他のこれを認めようとしていない急進民主主義の部分との一線をきっぱりと画している。

しかしながら、わが党と諸派間の論争で、社帝規定については一致しつつも、ソ連のプロ独の変質の歴史の時期について、あるいはスターリン評価をめぐっては様々な意見の不一致、対立を生んでいる。

そこで、われわれも含めて、各自が自らの具体的分析と論証をもつて、これら北の歴史過程があると考えよう。

今日のソ連は「口先では、共産主義、その実態は社会帝国主義」の社会帝国主義へ変質してしまっている。

この社会帝国主義(以下社帝と略)への変質——プロ独国家のブルジョア独裁国家への転化を要した——は、一足飛びに進んだものでなく、熾烈な階級闘争と支配階級としてのプロレタリアートの敗北の歴史過程があると考えよう。

わが党は、具体的にどうであったのか、改正する前の綱領第三章では次のようにして社会帝国主義国家に変質したのか」論文に導かれた社帝規定論である。

「現代修正主義がソ連共産党を制圧することによって、プロレタリア独裁のブルジョア独裁への変質が始まり、資本主義が復活・発展した。第二次大戦のなかで帝国主義と世界を分割支配したソ連は「全人民の国家、全国民の党」の旗をかかげてブルジョア独裁を行使し「社会主義」と資本主義の永遠の平和共存の主張の下に、帝国主義と結託して国際プロレタリア人民の闘争を抑圧しているばかりか、その闘いを利用して、帝国主義と世界支配のための争奪をおこなっている。それは口先では社会主義、実際の社会主義、すなわち社会帝国主義である。」

もちろん、ここでは具体的に歴史的時期の分析をしめしているわけではない。

その後、論争の発展の中でわれわれの主張もより深化した。

「スターリン時代の初期(レーニンが病気のため、政治から離れるをえつつは様々な意見の不一致、対立を生んでいる。そこで、われわれも含めて、各自が自らの具体的分析と論証をもつて、これら北の歴史過程があると考えよう。

前期——一九一七年の十月社会主義革命によって、一七七年以前の農奴主的、貴族的地主階級の手にあったロシアのソシアリイ専制国家を、ブルジョア民主主義的労働同盟を基礎としたプロレタリア独裁を樹立して、ロシアプロレタリアートは資本主義社会から社会主義社会へ根本的に転換する道をひいた。これはマルクス主義の革命的理論の勝利であり、世界史の新しい時代、新しい階級が支配する時代——世界プロレタリア共産主義革命の時代の始まりを画する世界的転換である。こうして、困難な社会主義戦争、内戦を闘いつつ、共産党とプロ独の強化を要し、レーニンの指導を先頭に、シグサグの道をとりながら社会的規模での社会主義革命が遂行された時期である。一九一九年ボリスエビキ綱領、コミンテルンの創設、一四年レーニン憲法等が関わり取られている。

後期——スターリン時代の初期から一九三九年に至る時期。ここでは①スターリン時代の初めから三十年代後半を貫いて、まず階級闘争の放棄が始まり(官僚主義、大ロシア民族排外主義、富農をはじめブルジョア分子との闘争等)②党内の修正主義が台頭し三十年代前

半において党の支配権を確立したこと③三十年代前半の生産関係の一大変化④旧ボリスエビキ国家機構の掃蕩⑤スターリン憲法にプロ独変質の法的承認がなされる⑥三十年代後半以降の大粛清等、一九三九年末に至って、一七七年に樹立されたプロ独国家が転換され、新たな支配階級による政治支配の基礎が確立された時期である。

第一期——四十年代の過渡期を言ひ、五十六年、六十二年を転換年とする全面的な資本主義の復興——国家独占資本主義の発展とブルジョア独裁国家の成熟の時期。

この時期は、第二次五カ年計画、第四次五カ年計画の高度成長、巨大独占企業の登場を経るマルクスに、第二次大戦下の世界分割闘争への参加、他民族抑圧、国内階級闘争の全面的抑圧、ソ連共産党、千回大会の「平和共存」「二十二年大会の「全人民の国家」「全人民の党」等の政治的マルクスとあわせてブルジョア独裁国家が社会主義国家として成熟した時代である。

第二期——六十年代初頭を言ひ今日に至る時期。

この時期は、全面的な社会主義への復興と社会帝国主義として確立し、七十年代に至って米帝と並んで世界の支配権を争う超巨大な「後進」社帝へ成長した時代である。S.H.V.(コメンコン)による「ミール」「ドルジバ」など東欧を含む巨大経済機構の形成と拡大、ワルシャワ条約機構、集団安保を経済、政治上のメルクマールに、六十八年、チェコへの武力侵略は公然たる社帝への転化の表現といわねばならない。七十七年新憲法(ブレスネフ憲法)はこれら一連の法的集約である。

序文 終り

(次号へつづく)

